

目標の共有と他者を意識した学びについて

杉本 慶子（上越教育大学学部）

要 約

本研究では、集団目標を共有するための1つの方法として、教師が目標を提示するのではなく、子どもたちも共に目標設定の場に参加し、目標を集団決定することを試みた。その結果、子どもたちは集団決定した目標を意識しながら、他者がどのように目標に向かって活動しているのかを確認し、自分の課題解決だけでなく、他者の課題解決の過程においても積極的に協力し合っているということが明らかになった。

〔キーワード〕 目標 集団決定 課題解決 他者 集団

研究の背景と目的

近年、子どもたちの「学び合い」に関する研究が行われ、多くのことが明らかになっている。

辺土名（2002）は、グループのリーダーが「目的型」であれば協働的な学びとなり、「方法型」であれば非協働的な学びになることを明らかにしている¹⁾。後者のグループでは、子どもたちの間で発言無視や学習意欲の阻害が行われ、自分から消極的発言をして活動から遠ざかる子どももいる。

しかし、こうした要因はリーダーだけにあるのではなく、周りのメンバー一人ひとりが「目的型」になっていないからだとも考えられる。そこで、子どもたち一人ひとりが目的型となるように、集団で目標を共有することによってさらなる協働的な学びができるのではないかと考えた。

集団目標については、島村（1985）が学習指導における目標の明確化の意義について学習階層論を中心として明らかにしている²⁾。しかし、目標を共有していくことについては述べられていない。また、小林（1985）も目標設定の必要性について述べている³⁾が、個人目標についてのみで、集団での目標共有については述べていない。

しかし、西岡・西側らによれば、集団に新しい目標を導入する際には、集団決定が非常に効果的であり、また、自分たちに影響を与える意思決定に彼ら自身が参加することによって安定した自発的な集団成員関係が成立することを明らかにしている⁴⁾。

そこで、本研究では、集団目標を共有するための1つの方法として、子どもたちも学習目標を設定する場に参加し、目標を集団決定することを試

みた。そうすることで、子どもたちは他者とのように関わりながら学んでいくのか、ということをはっきりさせる。

研究方法

1．調査について

新潟県公立H小学校5年36名を対象に2003年10月下旬、国語「子ども環境会議を開こう」という単元で調査を行った。各グループに1台のVTRとICレコーダーで記録し、2・4・6時間目と単元終了後にアンケートをとった。

2．手続き

教師からは、身の回りの環境問題を調べるといった活動内容が提示された。そして、教師と子どもたちが共に話し合っており、最後の時間に発表会をするということや「環境問題についてこのクラスみんなで調べたことをわかりあって、少しでも改善していこう」という活動目標が決定された。

3．分析方法

アンケートにより集団決定した目標に対する子どもたちの意識を分析した。また、会話プロトコルと学習行動記録からは子どもたちの学ぶ過程を分析した。

結果と考察

1．集団決定した目標についての子どもたちの意識

(1) 子どもたちは目標に基づいて、学習方法を決定し、目標からずれると修正する発言を

している。

- (2) 目標に関わる自分の持っている情報を他者に伝えている。
- (3) 子どもたちは目標設定の場に参加したことに高い満足を示している。

以上のことから、子どもたちは目標を意識し、集団決定したことに満足していることが明らかになった。

2. 子ども同士の相互作用について

- (1) 子どもたちは他者の学習状況に関心があり直接関わっていない学習者の学習状況も把握している。

〔事例〕 他者の学習状況を把握
Aが自分で書いた画用紙を持ち、自分の書いた文字の大きさで見えるか、Bに確認しようとする。
A：B、見えるー？
（Bは作業中）
（CとDは、Bが作業中だということ把握し、Bの代わりに画用紙を見に行く）
C：おいしいものボックス、落とし物ボックス
D：わかんないところがあるー
C：これとこれとこれがわかんない。

- (2) 子どもたちは学習状況・進捗を把握しながら、目標に基づいた評価・アドバイスを行っている。
- (3) 子どもたちは評価・アドバイスを、教師ではなく所属するグループ内に求めている。

以上のことから、子どもたちはグループ内のメンバーの学習状況を把握し、目標に基づいた評価・アドバイスを行っていることが明らかになった。

考察

今回のように、子どもたちが目標設定に参加する場を設けたことは、集団としての目標共有を促していたと考えられる。他者も自分と同じ目標に向かって活動しているからこそ、相互に学習状況・進捗を意識し合うようになり、課題解決にお

いても、補い合いながら、協働的になれるのだと考えられる。

結論

以上のことから、次の二点が明らかになった。

- (1) 子どもたちは目標を意識し、集団決定したことに満足している。
- (2) 子どもたちはグループ内のメンバーの学習状況を把握し、目標に基づいた評価や提案・アドバイスを行っている。

従って、子どもたちは目標設定の場に参加すると、目標を意識し、自分の課題解決だけでなく、他者の課題解決の過程においても積極的に協力し合うことが明らかになった。

今後の課題

今回は、始めから既成グループでの活動であったため、子どもたちがグループ内に縛られやすかった可能性もある。そこで、グループ活動ではない授業の場合でも、子どもたちは他者の課題解決に積極的に協力し合うのか、ということをはっきりさせる必要がある。

また今回は、子どもたちが目標設定の場に参加できるように、グループごとに話し合う時間を設けたが、より短時間で、しかもできるだけ子どもたちの意見が取り入れられる場を、どのように教師が設定していくか、ということも今後の課題である。

[引用文献・参考文献]

- 1) 辺土名智子：中学生の教科学習への参加構造と学びの関連性，上越教育大学修士論文，2002
- 2) 島村文男：学習指導における目標明確化の意義 説明的文章の読解指導への学習階層論援用を中心として，上越教育大学修士論文，1985
- 3) 小林敬明：能力に応じた目標設定と学習成果に関する一考察 走り幅跳びの指導を通して，上越教育大学修士論文，1985
- 4) 西岡忠義・西側明和：リーダーシップの心理，大日本図書，1998